

情報と矛盾：世界の構成

Information and Contradiction: a Quest for the Construction of Worlds

村主 朋 英*

Tomohide MURANUSHI

要 旨

本稿は、情報学と個人との関係再構築を図る過程の一部である。情報学にとって最も中核となる要因は思考する自我であると見なした上でそれを「ひと」を呼びかえ、ことば（おおまかに情報と比定できる）がひとをとりまいて見なす考えを基盤に置く。本稿では、まず、ひと（思考する自我）と世界との関係を論じた。ひとの経験する世界が可変であることから、それぞれの時点のそれぞれのひとが各々固有の世界を持つことを導いた。つづいて、そのような諸世界の併存する状況について、矛盾の概念を媒介に検討した。矛盾という語の転用により、ひとびとの世界間の関係を概念化した上で、世界間の矛盾とは、ひとびとのことばの組織のずれであるという解を得た。

キーワード：情報学の基礎 情報学的コスモロジー

1. 端緒

ひとは、わかるまでわからない。本稿では、このことからわかることを源泉として論考を進める。

2. 計画

2.1 背景

本稿は、情報学基礎論にかかわる一連の著作[1][2]の企図および論旨を背景に持つ。

第一論文[1]では、情報学に対する根源的な理解を求め、まず、「思考する自我」が情報学の中心であると見なす考えを導出した。これは、思考や認識の過程を情報学の対象領域の中心に据えるべきだという主張ではない。情報学の探求する種々の対象は情報学の中に混在する種々のアプローチに依存または付随し、そのいずれをも情報学全体の中心と見なすべきではないとの考えから、対象となりえない何かを求めて到達した着想である。

そのため、これは、情報学という領域または営為の根源的基盤に関する言明であると位置付けられる。ただし、その経緯からすれば、「思考する自我」が特定のアプローチまたは方法論に連合する限りにおいては、再び、中心と見なすべきではない。学術研究に従事するインテリジェンスではなく（というより、それらに限らず）、個人々人それぞれの自我を情報学の中心と見なすという趣旨である。

その上で、思考の発達が言語に随伴するという一般的諒解を手がかりに、自我をことばがとりまくという構図を策定し、それを基盤図式と位置付けた。このことばという語は情報という語に比定できるが、情報という

* 愛知淑徳大学人間情報学部 muransky @ asu.aasa.ac.jp

語形は種々の既成概念と結びつけられ、多様な代案が互いに少しずつずれを生じながら混在するという錯綜した様相を呈することから、使用を回避した。同じ理由で「思考する自我」を「ひと」と呼び換え、ひととことばというふたつの因子から成る世界観へと到達した。

次いで第二論文[2]では、ふたつの因子のうち、ひとをとりまくことばの様相について探求した。検討材料を情報学における基本的文献から引き出し、「科学的知識の総体の構成する歴史的時空」の概念に示唆を得ながら考察を進めた。まず、ことばの織り成す総体は混沌であると見定めた。次いで、その時間的・空間的特質を検討し、混沌（ことばの総体）に内在するひとびとがその機能および構造の要因であるという解を得た。

2.2 方針

一連の著作では、論述を唯一の方法として採用し、論証や説明のための作業を後日に期すという方針のもと、着想を導出・展開する作業に注力している。そのため、それらの成果は仮説群、あるいは仮定（前提）と推論から成る架構である。

また、第一論文では引用を行わないという方針を採った。第二論文においては、情報学における基本的文献をいくつか引用し、得られた示唆を用いて主要概念の整形過程を促進した。しかし、論考のための引証および説明のための例証については回避した。このことは、情報学に対する根源的な理解という目的に照らし、既成概念や既存の着想の借用・援用によって論考の疎漏が生ずることを避けるためである。

実際には暗黙の参照が内在し、論考の前提や展開に作用していることと思われる。今後、それらを適切に処置した上で、論証および説明のための補論を準備することが求められる。また、外部へと目を転ずれば、論旨や主題の類似する著作や、考えを進め掘り下げるために寄与する理論および概念が潤沢に見られるのだろう。たとえば「ひと」（思考する自我）に関して、人体としてのヒト、思考過程や認識・認知のメカニズムに関する既存の知見から、少なくとも間接的な示唆を得ることが期待できる。

しかし、潤沢であればこそ、回避すべきである。探索と選択のための作業により、労力や時間が確実に累増するだけでなく、得られる帰結が既存のまたは今後現れるテキストの連鎖の中に関連づけられることにより、いわば、ことばの側に取り込まれる。

そして何より、この一連の論考の延長には課題と拡張可能性とが多く残されている。論証を行なうにしても説明を加えるにしても、あるいは洗練・精緻化の工程を進めるにしても、所論を十分に揃えたのちに行なう方が効率的かつ効果的であると考えられる。そのため、本稿でも着想の導出・展開作業の継続を優先し、引用を行なう場合も、主要概念の整形等の補助的な目的に限定するものとする。

2.3 課題の同定

第二論文の帰結は略述的な解に留まっており、細部に関する解は得られなかった。探求を進めるためには、ひととことばとの関係や、ひとびとの間の関係など、ひとの様態に関する解が課題として残されている。しかし、「ことば」はともかく、対象化のできない何かを「ひと」と呼んだ以上、探求は容易ではない。探求という語自体が似つかわしくない程である。

そもそも一連の著作で示した「ひとをことばがとりまいている」という基本図式は、情報学を根本から捉え直す工程において採用した仮定であり、いわば方法論上の要請である。世界観という語も用いているが、形而上学的なステートメントとして成型されたものではないから、展開の手がかりに乏しい。

それ以上に、それを世界観と呼ぶのなら、孤立するほど珍しくはないにせよ、特異な部類に寄せられることだろう。とくに、「ひと＝思考する自我」に着目しているにもかかわらず、「ひとびと」自身の日常的な世界観とかけ離れた像となっている点が難点である。

われわれ「ひとびと」は、普段、ことばから成り立つ世界の中にいるとは思っていない。ことばを含むとしても、それだけではない世界を経験している。ことばは環境要因の一部であり、しかも、大方、メディアに付

与された記号表現として認めていることだろう。ことばを「情報」という語に換えれば多少は支持者が増えるかもしれないが、それが一般化した認識というわけではなさそうである。物体や生物から成る世界が、確固たる実在として、眼前にある。ほとんどのひとびとのほとんどの時間（ないしケース）においてそう考え、それで別に不自由はないことだろう。

そのような「経験」と基本図式との間の断層に、論考の余地が見いだされる。そこで本稿では、世界に関するひとの経験という問題に焦点を当てる。

3. 世界の構成

3.1 目覚め

世界に関する経験と呼びうる範囲は広く、多様な種類の接触や相互作用がすべて該当するかもしれないが、根幹となるのは世界について意識することなのではなかろうか。われわれが世界を詳細かつ明確に知ることは困難だとしても、たとえば世界が大きく広がっていると感じ取れば、世界の概念を獲得できる。つまり、世界という総体、あるいはその一部に気づくことが始原であると考えられる。究極的には、それは生誕した時か「物心のついた」時のことかもしれないが、日頃、たとえば睡眠からの覚醒という形で頻繁に起こることであろう。

目を覚ます時、それまで眠っていたことを知る。目覚めた後は眠らないよう努めることもできるし、逆に眠りにつくよう図ることもできる。しかし、眠る者は目が覚めるまで目を覚まそうとはしない。そもそも自らが眠っていることに気づかない。

目の覚めている者は、自己について思うことができる。また、睡眠について学術的見識を有するかどうかはともかく、眠りについて考えることや、眠る隣人や自分が眠っていた時のことを考えることができる。その結果、これらのことはいまさら言及するまでもなく至極当然のことに思われることだろう。しかし、だからといって、眠っている時について、よくわかっていると見なすべきではない。眠れる者について語ることはできても、眠れる者の心的状態を体験することはできず、目が覚めるまで目覚めようとするのできないその自覚なき苦境を共有することはない。

目覚めた状態と眠っている状態との間にそのような乖離が介在するなら、「眠る時もある」というよりも、目覚めている時と眠っている時というふたつの自分が交替で現れていると見なす方がよいのではなかろうか。

実のところ、ひとは平素、そのようなことも考えないまま（あるいは忘れたまま）過ごすことだろう。そしていずれにせよ、目覚める者も、いつか眠りにつく。自ら選んで眠ろうとすることもあれば、抗っても、不意に眠りに落ちることもあるようである。当人の思うままにならない要因によるというだけではなく、眠りにつく時を知らずに眠ることもありそうである。目覚めは状態ではなく出来事であり、おそらく、目覚めたあとは眠りにつくための（ゆるやかな）過程である。われわれは、そのようなサイクルにまきこまれ、振幅を止めることがない。

日常において睡眠は、不可欠な一時の休息であって不測の事態ではない。覚醒は単に、世界への復帰である。しかし思考する自我にとって、監視の及ばない時間があり、それが掌握できない作用によるということは、喜ばしいことではない。細密なタペストリーの綻びから壁紙が見えているような事態である。

同様のことは、覚醒している間にも起こっているかもしれない。何かに気づくこと、それは睡眠からの覚醒に似る。次節では、この点を掘り下げる。

3.2 わかるまでわからない

何かに目を留め、見えなかった物体の存在に気づき、そこにずっとあったのだとわかる。事態の変化に気づき、自分が不利な位置にあるとわかる。直面する困難の最大要因に気づくことにより、解決策がわかる。どのような場合も、気づくまでは気づかない、わかるまでわからないという点で、眠る者が目覚めるまで目覚めな

いことと似る。

睡眠時と異なり、理解しようと努め、気づく前に気づこうとするようなことはありそうである。しかし、その場合も、それまでの間は気づいていない・わかっていないということはかわらない。そして多くの場合、ひとは、わかっていないことには気づかず、何かわかった時、はじめてわかっていなかったと気づく。ひとは、わかるまではわからない。

わかる前にわかった後のことを知ることはできないから、「未来」の、今わからないことがわかっている状態についてはわからない。そしてそれだけではなく、わかった時にはわかっているのだから、わからなかった時の（つまり過去の）こともわからないのではなからうか。わかっていなかった時のことを自嘲したり、場合によって懐かしんだりするのは、その現れなのではないか。

やはり睡眠時と異なり、覚えている点はあるだろうし、また、時には想像するかもしれない。しかし、想像しようとしなくても多いはずであり、また、「記憶」が残るとしても、完全に共感し、わかっていなかった状態へと全身で立ち戻ることができるとは思われない。そう考えると、どうやら、覚醒している時にも異なる複数の状態があり、その間に乖離が介在するようである。

この「わかるまでわからない」ということを前提に措くと、ひとの世界について、いくつかのことがわかりそうである。

3.3 ひとの世界

何かに気づいた・何かがわかった時、ひとは異なる状態へとかわる。目覚めてから睡眠時のことを体験できないことと同様、ひとたびかわれば、その前に立ち戻ることにはできず、また、かわる前にその後を体験することもできない。その点において、異なる時の自分は他者である。

この変化は、睡眠と覚醒とは異なり、ふたつの状態の往還ではなく、ある状態から次の（他の）状態への遷移ということになる。気づくこと・わかることによって状態が変化するなら、気づく（わかる）対象の量に応じ、多くの状態が生起する可能性がある。

ひとは、さまざまなことに気づく。日々・刻々と、いろいろなことがわかる。したがって、かわる点や程度は時と場合で異なるだろう。個々の構成要素の組成から、その配置や作用・関係、全体の挙動・様相に至るまで、多くの点でかわる（新たに気づく・わかる）余地がある。一方、たとえば一度納得した事柄について、後日に再び理解を取り戻すようなこともありそうである。睡眠・覚醒ほどドラスティックでないにせよ、「そこに全く違う自分がある」と感動する（あるいは恐怖を覚える）ような体験も期待できる。

この状態変化に応じ、ひとの世界はしばしば交替する（というより交替しつづける）ということになるが、変化は御しがたい自然現象ではなさそうで、たとえば何かを理解しようと努めるなど、変化を促進する操作を採ることもありそうだし、逆に、何らかの意図または理由で、変化を食い止めようとする（気づこうとしない、わからないまま甘んずる）こともあるのかもしれない。一方、気づかぬうちにいつの間にか別の状態に置かれていることもあれば、気づかないまま認識を固定していることもあることだろう。

わかろうと努めることなく安住するというという事態がなぜ（どのような仕組みで）生ずるのか、どの程度の密度で現れるのか（普遍的なことなのか）という点は重要である。「わかろうとしないことは、時折起こる」あるいは「発展途上の一時的な状態である」と見たいところではある。しかし、それがありうるということ自体がより大きな意義を持つ。気づかぬまま変化する（あるいは変化しない）という可能性については尚更である。ひとは時として、抗いがたい流れにまきこまれるおそれがあると考えておくことが安全である。

もとより、ひとはどのように努めようとも、いつも、いろいろな多くのことに気づかないでいる（知らないままである）。わからなければわからないわけだが、わかっていないことが夥しく（限りなく）残されていることだけは想像できる。また、「過去にわかった（他の時に知っていた）」ことすべてを今ここでわかっているというわけでもない。そして、多くの時において多くの対象に対し、わかろうともしていない。

自らの状態が随時変化し、「他」にかわる可能性があること、その変化の先に、無数の展開可能性があること。これらのことは、ひとの見ている世界がそれほど確かなものではないことを示している。

3.4 ひとと世界

変化を許容する状態を仮に「そのひとの世界は開いている」と呼んでみよう。逆に、変化を許容しない状態を「そのひとの世界が閉じている」と言い表しておこう。

世界が閉じている時、その世界には外があるのに、当人は気づかないか、気づいていても受け入れようとしない。いずれにしてもその外に何かがあっても無効となる。対し、ひとがその世界を開いている時には、「外界」が認められ、世界に何らかの変化が生ずる。わからないことに気づくか、わかっていないということがわかれば、変化が助長・促進され、自らの世界を広げる工程が喚起されることもあるだろう。

しかし、すべてわかるようになることはない。世界を開き、あることについてわかった、あるいはあることがよくわかってきたという時も、他の何か（というよりほとんどのこと）については、まだわかっていない。しかも、以前にわかっていたことがわからなくなることもあることだろう。そうであれば、変化すれば変化した後の状態（「広がった」世界）がそのひとの新たな世界となるだけであり、つまるところ（いずれにしても）ひとはその世界から出られない。

これは、世界は広いのに、「自分の」世界から出られないということだろうか。この状態を「広い世界の中で、蒙昧な徒が自らの観念・幻に囚われながらそこかしこで蠢いている」と嘆くべきなのだろうか。

だがそもそも、そのような「広い世界」とは、前提として機能するような確かな実在だと考えるべきなのだろうか。仮にそうだとした場合、その「広い世界」の全体を詳細に把握することができるとは考えられない。もしできるとしても途方もない時間を要することだろうし、しかも、その時が来るまでは把握ができていない以上、それまでの時時において、その時点の世界から出られない。

何より、そのように到達しがたい何かを想定するならば、その時点で一つの世界観が介在しているといえる。つまりむしろ「人間は広い世界の中にいると考えるひとがいる」と記述すべきなのだろう。それが間違っているということではない。そのように考えないひとがいる／時がありうる、つまり他の世界観が成立しうるということである。逆に、その「広い世界」とは、全知全能の神という名のひとから見える一つの世界像でしかないと考えられないだろうか。

このことから、「まず世界があって、その中にひとがいる」と考えるのではなく、世界をそれぞれの（時時の）ひとに帰属させる方策を採るのがよいと考えられる。こうして、ひとの世界に外はなく、「他の世界」があるだけであるという考えが引き出される。

それぞれのひとにとって、外は厳然としてそこに在るのだろう。大きな世界がそこに在り、見たいものだけを見ていた蒙昧を悔いて自分を成長させ、視野を広げていくこともできる。しかしこの考えに基づけば、そこで想定する「外」は、実際には自らの世界の内にあるものと考えべきであろう。世界を開き、外の世界を探求していると思う時、実際には、内なる外を探求している。つまり、いまだ世界の涯までわかっていないと思う時、実際にはその涯の向こう側まで到達しており、すでに掌握した世界の仔細を再発見しつづけている。ひとは、世界についてわかってきたと思いながら、その実、かわりつづけるだけである。「外」へ進出するのではない。「他」となるだけである。つまりひとは、未知の領域を引き連れた自分の世界の中に囲われている。

ひとは、「広い世界に自分がいる」という世界観のもとで安住することができる。そしてひとはそれぞれ、世界の構成についても、なにがしかの「知識」を持っている。居室・活動場所や公共施設・交通機関に設備備品その他の物体があり、他人と自分がいて、それぞれ衣服や所持品を帯同している。その周囲を自然環境が取り囲み、他方、自らの内面世界を認め、隠匿することもできる。もっと遠くには未知の領域が果てしなく広がって、冒険心を抱けば、存分に探求することができる。ひと「当人」にとってその世界は、確固たる豊穡の実在である。

ところが実際の「外」では、時の異なる自分を含むひとびとそれぞれが互いに異なる世界と向き合い、それぞれの世界に対し信頼を置きながら併存している。そのような絶対が混在する状況は、「矛盾」という語を想起させる。

4. 付加解

4.1 矛盾の概念

矛盾という語は文字通りの「古典」語である。故事成語として日本の日常言語に組み込まれ、日用が重ねられる一方、学術用語の訳語として転用された。それに由来する連関が付加されるうちに、単なる不合理、はなはだしくは「不快」という程度の含みで用いる例が生ずるなど、用法に幅と揺れとがある。

4.1.1 基本語義の成立過程

学術上の用法は、ギリシア哲学にはじまる[3]。Aristoteles は論理学の体系化する際、矛盾律と排中律・同一律の三つを根本原理と位置付けた。形而上学における規定は「同じものが同時に、そしてまた同じ事情のもとで、同じものに属しかつ属さないということは不可能である」というものである。「同じ観点で同じ事情のもとで異なったことを言う（行なう）ことはできない」という（Platon にも通ずる）考え方に基づく。

命題論理において、矛盾律と排中律・同一律の三者は基本的な恒真式という位置付けを与えられている。その文脈では、矛盾という語は整合（consistency）と対で用いられる。「無矛盾＝整合」と規定され、矛盾論理式と恒真論理式が対置され、妥当な推論は無矛盾である。矛盾概念も単なる反意語ではなく、A と非 A の関係（補集合の関係）である。

この文脈で矛盾に対応づけられるギリシア語は antilogos である。英語 contradiction は反駁・反論を意味するラテン語に由来し、OED 第2版では、以下のように語義が展開されている[4]。

- (1) the action of speaking against; gainsaying; opposition
- (2) the action of contradicting, declaring to be untrue or erroneous
- (3) a statement that contradicts or denies the truth or correctness of another
- (4) a state or condition of opposition in things compared; variance; inconsistency; contrariety

これらに続き、論理学に関連するより詳細な語義および派生的な用法が示されている。この系列を通じ、「反対意見を述べる」という弁証法に関係する語が Aristoteles の裁定によって思考の問題と結びつけられ、やがて論理学上の概念として確立・展開したという経緯を見ることができる。

日本においては、中国の「矛盾」の故事がパラドクスに関係することから転用され、反駁という含みは反映されていない。たとえば『哲学字彙』（明治14年）の contradiction の訳語において、“乖角、背戾、矛盾、背馳、忤逆、柄鑿、反言對（論）”と並び、三つめに「矛盾」、末尾にも論理用語としての訳が記される一方、反駁・反論に相当する（程度の軽微な様を示す）訳語が示されていない。ヨーロッパにおいて論理的な語義が成立・定着した後の状況に依拠することがうかがわれる。このことから、矛盾の基本義は反論・反駁という出生を離れ、論理学における基本概念という安住地位を得たことがうかがわれる。

4.1.2 社会と矛盾

矛盾という語の用法には、弁証法的唯物論に見られるような「社会的矛盾」という領域がある。

M. Wolff[6]は、Högel の矛盾と弁証法に関する考え方に関して、思想史的観点から、Aristoteles および Kant らの考え方と対比しながら論じている。

Högel 哲学を基盤とする弁証法的唯物論では、対立物の相克とその解決による発展という図式が汎用される。矛盾とは弁証法は思考の原理というだけではなく、「万物」の最も基本的な作用因と位置付けられる。自然の基本原理であり、また（あるいはそれゆえに）社会の基本原理であると見なされる。

この系譜において、矛盾は認識論上の主題から存在論上の主題へと拡張（少なくとも転用）された。社会活動の主体間の対立や争いが矛盾という語によって概念化され、矛盾の発生から解消に至る過程に対し運動の普遍原理という解釈が付与されると、階級闘争のモデルないし根拠として機能した。このような観点の矛盾論としては毛沢東の主著が著名であり、そのほかに、旧社会主義諸国のみならず、日本においても著作がある。そのうち、包括的な議論を G. Stiehler [7] が行なっている。

このような考えの妥当性についてはさておき、矛盾の概念が論理学上の主題以外に適用された点が示唆的である。

矛盾は本来、弁論術の文脈に出自を持つから、人間の言語にかかわることを純化し、いわば肉を落として形式という骨格を取り出したような概念である。対し、「人間による社会的矛盾」や「社会に対する矛盾の影響」といったことを考え進めるなら、その途中には人間（個人）の問題が横たわる。そのため、矛盾の概念は、心理学上の主題としても成立する。

4.1.3 心理と矛盾

心理学の文脈においては、矛盾感情という語が存在したり、あるいは単に不合理とかおかしいといった程度の意味で矛盾という語が用いられたりするなど、矛盾が「悩み」として扱われることがある。

Piaget ら [8] は発達心理学の文脈での「矛盾」研究を統括し、認知的不均衡 (cognitive disequilibrium) による混乱を解消し安定をめざす心理的過程の解明を試みた。その上で彼は、論理的な矛盾と心理的な矛盾の差異を検討している。前者が形式的な関係であるのに対して、心理的な矛盾は直観・主観的感情・概念化されていない行為に起因し、すなわち客観的な論理構造が認識主体に矛盾状態を起こさせるのではなく、主体自身が矛盾状態をつくっているという考えを提示している。

一方、Festinger [9] は、社会心理学におけるメッセージ選択研究の文脈で、矛盾や不整合といったマイナス・イメージのある語にかえて不協和 (dissonance) という用語を採用している。これは不整合な認知によって生ずる不快な心理状態を解消しようという性質が認知機構に備わっていると仮定する認知的整合性 (cognitive consistency) 理論の一種として位置付けられている。Festinger は、不協和に関する人間の認知的機構を考察したあと、不協和に基づく行動が社会的コミュニケーション過程に及ぼす影響を述べている。

このように、Piaget は心理的な矛盾が論理的な矛盾と関連を持つものの、それと異なる要因を背景としていると主張した。一方、Festinger は、矛盾にかかわる（社会）心理学的な現象または傾向を探求している。いずれにおいても、論理における矛盾および社会的矛盾と異なる概念が確保された。

4.1.4 収穫

以上、三つの領域における矛盾の概念について概観した。まず弁論における言語表現の相反関係が概念化され、論理にかかわる概念として精緻化されたあと、そこから社会的矛盾に関する考えが展開する。そこには、矛盾を自然（物理的）原理と結びつける解が付随する。最後に、後発の心理学・社会心理学的な矛盾に関する考えが現れている。この間、矛盾が思考に関する普遍原則であるという規定に端を置き、その法源を客観的世界に帰する主張を経て、心理的現象（精神的な問題）として扱うアプローチが生ずるという解釈の振幅が見られる。

全く別個・新規に提案されたわけではないから、根本的に異質なものではないのだろう。しかし振幅の大きさからすれば、特定の対象ないし主題に関する論争の進展と見るよりも、この概念を人間をとりまくことに対して順次適用した過程と見なす方がよさそうである。矛盾が物理的自然の運動原理であるという主張も、経緯

からすれば、真相の解明というより原概念の展開による応用解である。それを含め、各々の考えは、ひとつの概念をそれぞれの関心領域に適用して得られた version と見ることが適切であると思われる。

個々の考えの implication や妥当性、学説史・思想史上の評価・位置付けに関して、このような水準のレビューから答えが得られるものではなく、またそれは本稿の計画には含まれない。そこで本稿では、この議論の系譜に見出される概念の「鑄型」に注目する。

次節では、3.4において認めた事態に関してこの概念型を導入し、解の展開を進める。

4.2 展解

4.2.1 ひとつの世界の矛盾

他の世界との関係（あるいは、「ひとつの世界」どうしとの関係）に対して矛盾という語を充てると、それは（当然ながら）現用の範囲になく、意味をなさないから、新たな概念の形成が促される。ひとにとって他のひとつの世界は見えず、ただ推定されるだけだが、「世界の矛盾」ということばを用いて新たな概念を得ることにより、そのような不可解な関係を対象化することができるかと期待される。

隔絶し、相まみえることのない世界間の矛盾とは、対立や相克ではなく、それぞれ異なるまま並立することであると考えられる。矛盾の故事に即して言えば、至高の矛を賞賛するひとと究極の盾を推奨するひとは相容れない世界（いわば、矛世界と盾世界）を持つ。別の人物の間での対立であれ同一人物の自家撞着であれ、言語表現または論理という座標系に射影すれば、矛盾律に基づいて適切に指弾することができるが、それによって世界を処断することはできず、個々の世界は保全される。

ただ、矛盾と称しても、このような、「主張」において先鋭的な対立が生ずるような少数のケースに限る必要はなかろう。「わかるまではわからない」ということが世界を分つから、任意のふたつの世界の間には「わかることとわからないこと」という「対立」ないし対比が必ず認められる。

したがって、ひとつの世界の矛盾とは特定の二者の関係ではなく任意の世界間で成立する関係であり、わかること（わかっていること）の総体に関する相互のずれによって規定することができる。

4.2.2 ことばと世界の矛盾

ひとはそれぞれ、自分の世界についてはよくわかっている。すべてについて文字通り「よく」わかっているとしても、種々の物体が種々の作用を起こしていることを知っているはずである。さらにそこには自分自身が含まれ、他者と種々の相互作用を生じていることもわかっている。まずはその「自身」の介在が最大の分岐点であり、それに因んで多くの相違が生ずると予想される。しかしそれだけではなく、おそらくひとびとの世界は、そこに含まれることの一つ一つにおいて相互に異なる可能性を帯びている。

それは「ありうること」として想定されるだけのことであるが、ひとつの世界が「わかることによってかわる」という点が推定の手がかりとなる。

新たなことがわかるという経験を日々刻々と重ねるうち、いつしかわれわれは、おびただしい数量のことがらわかるようになっていく。だが、わかっていたことがわからなくなることもしばしば起こるし、かと思うと、あらためてわかったという経験も稀ではない。

中には、ことばによってわかることがある。また、ことばではわからないということもある。あるいは、ことばがわからないこともある。こうしたことから、ことばとわかったこと、あるいはことばと「わかること」とが密接に結びつくことは容易に推定できる。ならば、世界間の矛盾についても、ことばに関わる関係であることが同様に推察される。おそらく世界間の矛盾とは、ひとびとのことばの総体の持つ組織のずれであると再記述することができる。

ことばが必ずひとつの世界をかえるという保証はない。知らないことば、とくに、耳に馴染まない／耳障りなことばや異質な／理解不能なことばであれば、世界の変化をもたらさない（場合によっては妨げる）可能性も

ありそうである。しかしながら、わかっていることと異なることばに接する経験は、他の世界に気づき、その世界の様子を推し量るための貴重で有効な契機となるであろう。ことばは世界の構成に関与する一方で、その世界から出られない者のための誘導灯をそこかしこに配置しているようである。

5. 結び

本稿では、まず、ひと（思考する自我）と世界との関係を論じた。ひとの経験する世界が可変であることから、それぞれの時点のそれぞれのひとが各々固有の世界を持つことを導いた。つづいて、そのような諸世界が併存する状況について、矛盾の概念を媒介に検討した。矛盾という語の転用により、ひとびとの世界間の関係を概念化した上で、世界間の矛盾とは、ひとびとのことばの組織のずれであるという解を得た。前稿で認めた混沌（ひとをとりまくことばの構成する総体）は、このような相互関係を持つ世界によって形成されていることになる。

すでに前稿[2]で、混沌が矛盾を含むという考えに言及したが、それは「多様なことばが混在するのであれば互いに反する言説が両立する」という推定であった。それに対し、本稿における展開から、それは相異なるひとの世界が併存することに基づくという解が得られる。

さらに、ひとびとの世界間の矛盾という事態を概念化することによって、探求の困難な「思考する自我」の特性について（あたかも後方から光線が照射され眼前に自身の影がつくられるかのように）いくつかの手がかりが示された。とりわけその打ち勝ちがたさがうかがわれ、そのことによって次の課題も明確になった。

まず、本稿では、ことばとひととの関係に関して掘り下げることはできなかった。ことばとひとの接触、あるいはそれを通じたひとびとの間の相互作用に留まらず、各々のひとの世界とことばが結びついて引き起こす事態に関する解が求められる。

それとともに、「打ち勝ちがたさ」が示唆されたということは、事態に関する理解に留まらず、何らかの「方策」が求められているのかもしれない。この一連の論考では、ある種の世界観（あるいは諸世界を包摂する超越的な世界像という意味で、宇宙観）を示してきたが、その追究に勤しむだけなら、結局はひとつの説（ことば）に終わるといふ危険がある。そこで、思考する自我の動態に対する寄与を明示的な課題として数えることにする。

このテキストと向き合っている今、われわれは目覚めているというだけでなくかなり鋭敏であり、さまざまなことについて気づくことができそうである。しかし、その足場は誠に心許ないもので、程なく世界を閉じ、深い淵に沈んでしまうかもしれない。それゆえ、この、自らが目覚めていると認めていられる奇蹟のような時の間に、できるかぎり考えを進めておきたいものである。

引用文献

- [1] 村主朋英. 情報学の中核にあるもの：根源からの再出発を企図して. 愛知淑徳大学論集文学部・文学研究科篇. No. 35, 2010, p. 123-134.
- [2] 村主朋英. 情報の時空：われわれをとりまくもの. 愛知淑徳大学論集人間情報学部篇. No. 1, 2011, p. 31-44.
- [3] 哲学事典. 改訂新版. 東京, 平凡社, 1971. (“矛盾”, “矛盾律”, “矛盾概念”, “無矛盾性”)
- [4] The Oxford English Dictionary. 2nd ed. Oxford, Clarendon Press, 1989.
- [5] 哲学字彙. 近代日本学術用語集成 第1巻. 東京, 龍溪書舎, 1988.
- [6] Wolff, Michael. 矛盾の概念. 山口祐弘ほか訳. 東京, 学陽書房, 1984. 291p.
- [7] Stiehler, Gottfried. 弁証法と矛盾. 福田静夫訳. 東京, 青木書店, 1972. 281p.
- [8] Piaget, Jean. 矛盾の研究. 芳賀純ほか訳. 東京, 三和書房, 1986. 396p.
- [9] Festinger, Leon. 認知的不協和の理論. 末永俊郎監訳. 東京, 誠信書房, 1965. 277p.